

2014年1月6日

各位

JXホールディングス株式会社

2014年 会長・社長 年頭挨拶について

本日、当社会長 木村 康および社長 松下 功夫からグループ社員に対して実施した年頭挨拶の要旨につきまして、下記のとおりお知らせいたします。

記

<会長(木村 康)年頭挨拶>

1. 今年の展望・課題

昨年は、わが国においては第2次安倍内閣の下、アベノミクスの第1・第2の矢により景気の浮揚を実感するとともに、2020年の東京オリンピック開催が決定し、ある種の閉塞感から脱して新しい時代の幕開けを感じた年であった。

世界では、米国経済が回復しつつある一方で、欧州は通貨危機の懸念が払拭できておらず、新興国の成長率も鈍化しており、主要国では「持続的な成長のために構造改革が不可欠」との認識に立って、次のステージに移行する転換期を迎えている。

当社グループも、昨年4月より「飛躍のスタート」と位置づける第2次中期経営計画(第2次中計)の初年度が始まったが、現時点での損益の見込みはたいへん厳しく、早くも正念場を迎えている。

今年には、まず第2次中計の初年度目標の達成に向け、残り3ヵ月を奮闘しなければならない。

2. グループ社員への期待

グローバルにも、また、わが国でも大きな転換期を迎え、変革が求められているなか、本年はグループの「飛躍」のために直ちに具体的な行動を開始することが必要である。

これまで、3つの意識(当事者意識、プロ意識、変革意識)を持った「個の確立」を求めてきたが、本年はこれに加えて「組織の活性化」をさらに図ってほしい。そのために重要なことは、さまざまな状況においてお互いのことを「見ること」、「思い・考えること」、「言えること」、「動くこと」のサイクルを意識して実践してほしい。「個の確立」と「組織の活性化」を両輪として、個人も会社もさらに成長していくことを期待している。

3. 経営理念・行動指針の浸透

昨年もいくつかの不祥事があり、その根本的な原因は「倫理観の欠如」にあると考える。

当社グループでは、改めて全社員一人ひとりが「高い倫理観」とは何かを考え、経営理念と行動指針を自分の行動に落とし込んで日々実践してもらいたい。

4. 結び

本年、わが国は成長戦略の実行に向けて事実上のスタートを切る。
当社グループも輝かしいX(みらい)を手にするよう、力を合わせて邁進していこう。

<社長(松下 功夫)年頭挨拶>

1. 昨年を振り返って

昨年は、厳しい事業環境の下であったが、当社グループのこれからの飛躍に向けた第2次中期経営計画(第2次中計)の初年度として、

(1) エネルギー事業

石油精製販売の収益力強化に向けた、「Dr.Drive のリニューアル」、「鹿島製油所におけるSDA装置・発電設備の設置」

「天然ガス、石炭、新エネルギー、化学品における主要プロジェクト」の推進

(2) 石油・天然ガス開発事業

「アラビア石油子会社の株式譲り受けによる新体制の発足」

第2次中計上の基本戦略に則った「油田・ガス田の開発移行、新規鉱区・権益の取得」

(3) 金属事業

「カセロネス鉱山の生産開始に向けた最終作業」

電材加工分野での「掛川新工場の竣工・稼働」、「台湾における龍潭工場の竣工」

などを進展させることができた。

2. 本年の重点課題と取り組み

本年は、「コンプライアンスが事業活動の大前提であること」を再認識し、改めてグループ社員全員で誓い合いたい。

そのうえで、目下の最大の課題は第2次中計の初年度目標の達成にあるが、新年度に向けて、必要があれば戦略を見直していきたい。事業別には、

(1) エネルギー事業

高度化法対応後における、「ENEOSブランドの強化」、「国内最高の競争力を有する製造・販売体制の構築」、「海外事業展開の加速」、「新規事業の戦略的推進」

(2) 石油・天然ガス開発事業

中期的な生産量の維持・拡大を念頭とした「資産ポートフォリオの再構築」

(3) 金属事業

「カセロネス鉱山」の早期立ち上げ。銅製錬、電材加工、環境リサイクルの主要事業における「安全・安定操業の継続」を前提とした実績の積み重ね

を着実に図っていく。

3. グループ社員への期待

本年は、JXグループの「飛躍のスタート」を確実なものとするため、社員各自が改めて次の3点を再認識し、JXグループのX(みらい)を切り拓いてほしい。

(1) チャレンジ

「自らの業務をどう変革していけばよいのか？」を真剣に考え、自らの志としてチャレンジングな目標を立て、その達成に向けて行動しフォローすること

(2) コミュニケーション

当社グループの成長には、しっかりと対話があり、建設的な議論があることが不可欠であり、お互いに関心を持って対話・議論を重ねること

(3) スピード感

時代の変化は早く、機会を損失しないようスピード感を持って行うことを常に心がけること

4. 結び

本年の干支にあやかり、当社グループが「天馬空を行く」が如く自由奔放に飛躍することを期して、グループ一丸となり目標達成に向け駆けていく年にしたい。

以上